



## 第一部 アニコムグループの使命

1. 「保険」と「医療」の共進化
2. 保険の真の使命は「予防」

## 第二部 高度医療領域での具体的実装

1. JARVIS どうぶつ医療センター Tokyo の状況
2. ペットホテル JARVIS Tokyo (同ビル6階) の状況
3. 高度動物医療における需要の状況
4. 商圏の広がり
5. 診療科の広がり
6. まとめ

# 第一部

## アニコムグループの使命

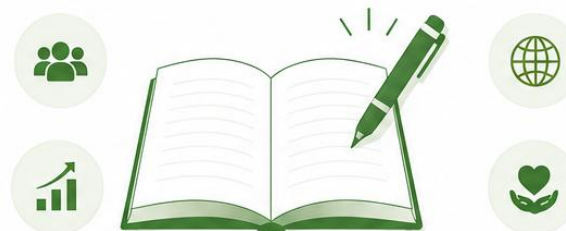


※本章は、当社データ等に基づく分析・示唆を整理したものであり、医学的因果関係や効果を確定的に示すものではありません。

# 1. 「保険」と「医療」の共進化

1 社会人の使命は、  
教科書を読むことではなく、**教科書を書くこと。**

社会的に価値あることを、日々の仕事で推進する。



2 我々のドメインは、  
「**医療**」と「**保険**」。



保険金を支払うだけでも、  
治療するだけでもない。



なぜその傷病が起こったのか。  
真の病気を探求し、



そもそも病気が発生しない  
予防策を提供する。



社会に笑顔を増やす。

社会に  
笑顔を増やす。



これが、  
我々の新しい経営方針です。

“支払う”だけでも、  
“治療する”だけでもない。

**未だ存在しない  
価値創造へ。**



3 予防は、  
「**何も起こらない価値**」。



だからこそ、  
価値が見えづらく、



ビジネスに  
なりにくい。



その予防を、  
どうマネタイズするのか。



## 2. 保険の真の使命は「予防」

### (1) 保険事業は次のフェーズへ

日本中の多くの生損保が当社の保険を販売する環境は整っている。  
今後は、**収益化による持続的な成長**を実現するフェーズへ移行する。

① 保険の営業フェーズは既に構築されつつある



今や日本中の多くの生損保が、当社の保険を販売している。

販売基盤の拡大は進展

② 次の経営課題は「収益化」



持続的成長のためには、収益性の向上が不可欠である。

収益構造の転換が必要

③ 最大の変動費は「保険金」



現在は、保険金の上昇が経営上の大きな課題である。

保険金のコントロールが鍵

④ 損害率1%改善は、利益へ大きく寄与



「予防・早期発見」を通じて損害率を1%減らせると、売上の1%が利益増に寄与する。

小さな改善が大きな成果に

⑤ 当社の保険金規模は約400億円

年間保険金 (概算)

約400億円

大きなインパクトが期待できる領域である。

改善余地の大きい構造

### 結論

営業拡大型モデルから、**予防による保険金構造の改善**を通じた高収益体質への転換を目指す。

営業拡大フェーズ  
(これまで)



収益改善フェーズ  
(これから)



# 2. 保険の真の使命は「予防」

## (2) 我々が予防対象とする疾患

予防的を「若齢 × 慢性疾患」に絞り込むことで、将来の重篤疾患の発症抑制と保険金の構造的な改善を目指す。

### ① 予防の対象は、「若齢×慢性疾患」



💡 若齢期の慢性疾患を予防することで、高齢期の保険金減少に加え、波及する様々な疾患の発症も抑制する。

### ② 具体的な予防対象疾患

若齢期に多く、慢性的に経過する以下の疾患にフォーカスする。

嘔吐・下痢・血便



繰り返し発生しやすく、慢性化の起点となる。

胃腸炎



慢性化・再発により、全身への影響が拡大。

アレルギー性皮膚炎



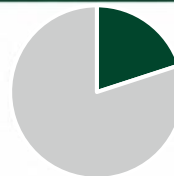
慢性的な痒み・炎症が、QOLを大きく低下。

アトピー性皮膚炎



長期化しやすく、二次疾患のリスクも高い。

### ③ 保険金に占めるインパクト



これらの疾患は、全保険金の **20%** を占める。

関連する他の疾患も含めると、影響はさらに大きいと考える。



まとめ

若齢期の慢性疾患に早期から介入（予防）



慢性疾患リスクの低減に寄与



免疫の健全化・腸内環境の安定  
口腔環境の改善・多様な食事

重篤疾患の発症を抑制し、保険金の削減に貢献



持続的な利益成長と社会の笑顔につなげる。



予防は、将来の健康と保険金構造を変える極めて重要な投資である。



## 2. 保険の真の使命は「予防」

### (3) 若齢慢性疾患と「免疫」

免疫の状態が日々の健康を左右し、若齢期からのケアが将来の重篤疾患予防につながる。

#### 1 若齢慢性疾患には「免疫不全」が関与している可能性



免疫の働きが十分でない状態が、慢性的な不調の背景にある可能性がある。

#### 2 犬猫は軽微症状が長期放置されやすい



痛みや不調を隠す習性があり、早期に気づきにくい。

#### 3 軽微症状への早期介入が重篤疾患予防に重要

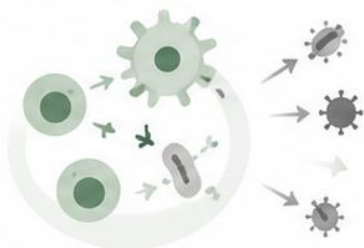


早期の対応が、将来の大きなリスクとコストを防ぐ。

将来の重篤疾患のリスクを低減



#### 4 免疫細胞は日々、異常細胞・細菌・ウイルスを排除している



免疫細胞（白血球など）が体内を巡り、異常な細胞や病原体から体を守っている。



免疫は「健康の土台」であり、毎日休まず働いている。

#### 5 慢性炎症や免疫疲弊は、重篤疾患へ繋がる可能性がある



重篤疾患へ進行するリスク

主な重篤疾患の例

- ・がん
- ・心疾患（弁膜症）
- ・慢性腎臓病 等

➔ 免疫の状態を整え、軽微なサインに早期から対応することが、将来の重篤疾患予防の鍵となる。



## 2. 保険の真の使命は「予防」

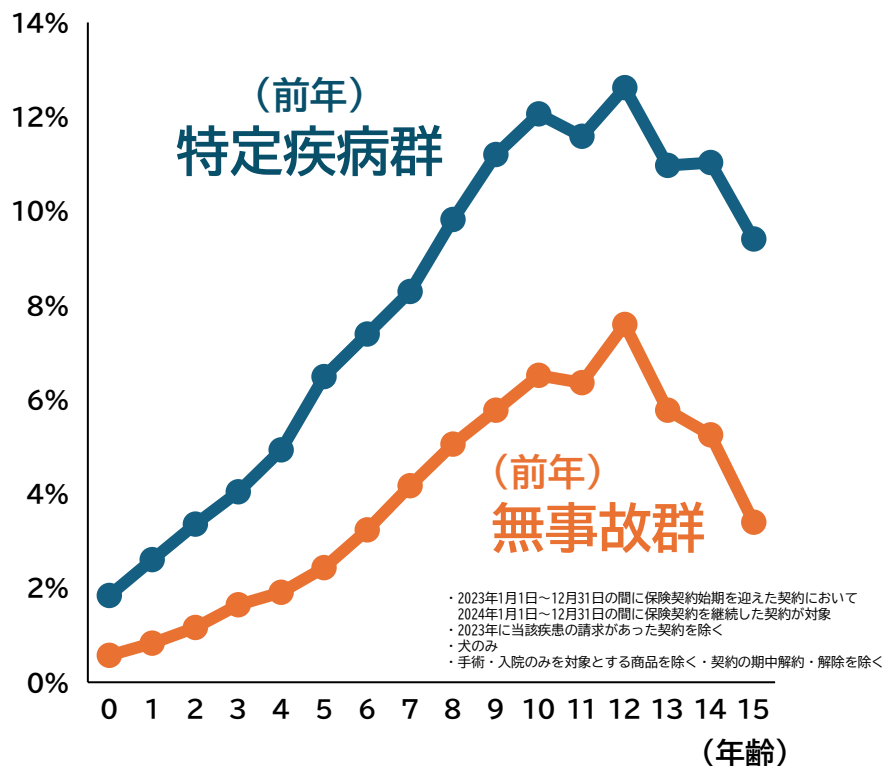


### (3) 若齢慢性疾患と「免疫」

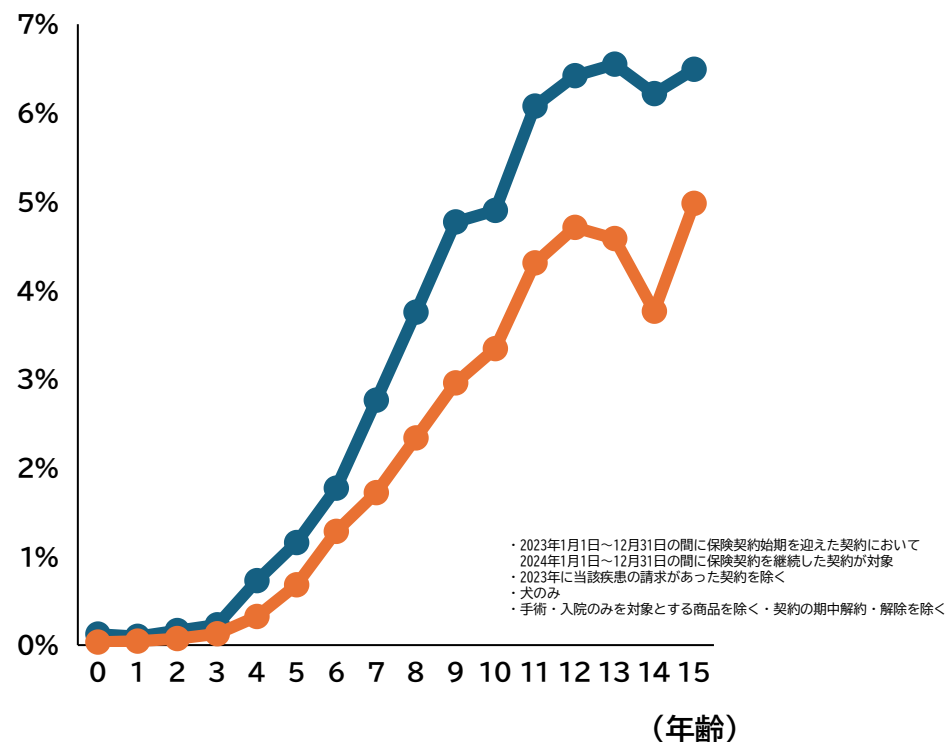
#### 前年の特定疾病有病別 疾患有病率

- 【特定疾病】
- ・嘔吐・下痢・血便
  - ・胃炎・腸炎・胃腸炎
  - ・アトピー性皮膚炎
  - ・アレルギー性皮膚炎

#### 腫瘍性疾患有病率



#### 心疾患(弁膜症)有病率



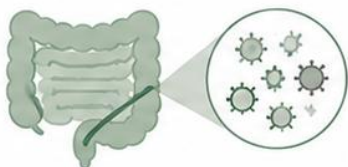
前年に特定疾病の請求がある群では、翌年の重篤疾患請求率が高い傾向

## 2. 保険の真の使命は「予防」

### (4) 腸内免疫と免疫学習

腸は免疫機能と深く関わり、免疫学習や慢性炎症リスクに影響する可能性がある。

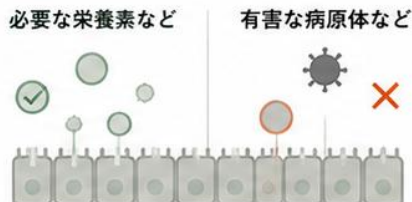
- 1 免疫機能の約**70%**は腸に集中していると言われている<sup>(※)</sup>



腸は最大の免疫器官であり、全身の免疫機能の中核を担う。

(※)参照:「大正製薬 製品情報サイト」 <https://brand.taisho.co.jp/contents/livita/559/>

- 2 腸は「取り込むべきもの」を識別する重要器官



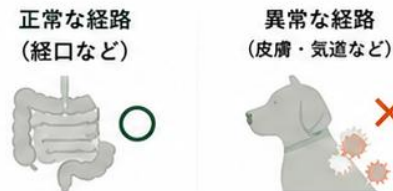
腸は、体に必要なものと有害なものを見極め、適切に取り込む役割を持つ。

- 3 免疫は「敵」だけでなく「無害」を学習する



免疫は、日々の経験を通じて「無害なもの」を学習し、過剰反応を防いでいる。

- 4 異常な侵入経路は「敵」と認識されやすい可能性



本来の経路以外からの侵入は、免疫に「敵」として認識されやすくなる。

- 5 免疫学習異常が慢性炎症へ関与している可能性



主な関与が疑われる疾患例

- ・アトピー
- ・アレルギー
- ・慢性胃腸炎 等

免疫が過剰に反応し続けることで、慢性的な炎症状態に陥る可能性がある。

- 6 食事・腸内細菌叢・口腔環境が免疫学習へ影響している可能性



これらの環境因子が、免疫の学習とバランス形成に大きく影響すると考えられている。

- 7 犬猫では主食原料が ※次スライドに詳細資料 アレルゲン上位となる特徴がある



犬猫では、日常的に摂取する主食原料がアレルゲンとして上位に挙がる傾向がある。

➔ 腸内環境の最適化と免疫学習の健全化が、慢性炎症の予防と健康寿命の延伸に繋がる可能性がある。



## 2. 保険の真の使命は「予防」

### (4) 腸内免疫と免疫学習



鶏肉



小麦



トウモロコシ

ヒト



順位	アレルゲン	割合 (%)
1	鶏卵	26.7
2	木の実類	24.6
3	牛乳	13.4
4	小麦	8.1
5	落花生	7.0

犬



順位	アレルゲン	割合 (%)
1	鶏肉	17
2	牛肉	16
3	小麦	15
4	乳製品	12
5	豚肉	10

当社調べ (n=591)

猫



順位	アレルゲン	割合 (%)
1	鶏肉	11
2	牛肉	6
3	魚	6
4	小麦、トウモロコシ	5
5	卵	3

当社調べ (n=64)

調査対象： 0~83歳  
何らかの食物を摂取後60分以内に症状が出現し、かつ医療機関を受診したもの (n=6033)  
出典：消費者庁  
「食物アレルギーに関連する食品表示に関する調査研究事業」

(令和6年)

※犬猫は当社調査に基づく参考値であり、調査方法・対象数により結果は変動する可能性があります。



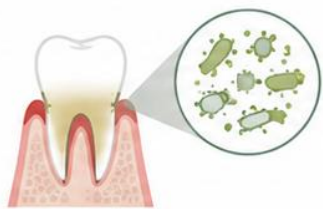
当社調査では、ペットフードの主原料として一般的に使用される食材が、犬猫のアレルゲン上位に含まれている。

## 2. 保険の真の使命は「予防」

### (5) 歯周病・腸内細菌叢と保険金構造改善

口腔と腸の健康は、慢性炎症の抑制と重篤疾患の予防を通じて、保険金構造の改善に繋がる可能性がある。

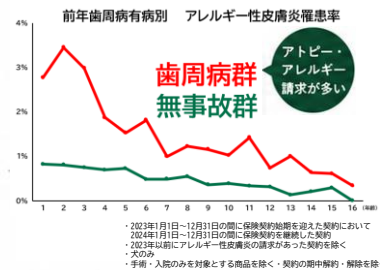
① 我々は原因の一つとして「歯周病」に着目



慢性炎症の起点となり得る「歯周病」が、全身の健康や様々な疾患に影響している可能性がある。

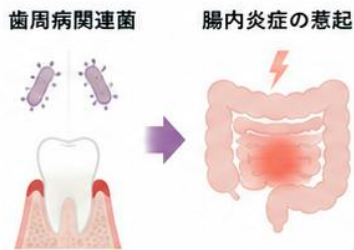
② 歯周病請求群では翌年アトピー・アレルギーが多い

歯周病請求のあった犬猫の翌年の請求傾向 (イメージ)



歯周病がある犬猫は、翌年にアトピー・アレルギーの請求が多くなる傾向が見られる。

③ 歯周病関連菌は腸内炎症を惹起する可能性



歯周病関連菌やその産生物が血流や飲み込みにより腸へ到達し、腸内の炎症を引き起こす可能性があると考えられる。

④ 腸内細菌叢の多様性低下は様々な疾患と関連する可能性

多様性が高い状態 → 多様性が低下した状態



腸内細菌叢の多様性低下は、慢性炎症や様々な疾患のリスクと関連する可能性がある。

⑤ 「口腔ケア」と「多様な食事」は保険金構造改善に繋がる可能性がある



口腔ケア + 多様な食事

慢性炎症の抑制と重篤疾患の予防を通じて、保険金構造の改善に寄与する可能性がある。

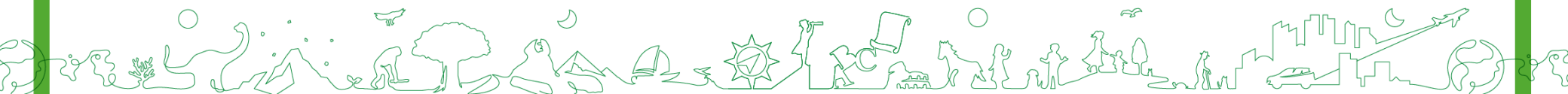


口腔と腸の健康は、慢性炎症リスクや重篤疾患リスクの低減を通じて、保険金構造の改善に寄与する可能性がある。



## 第二部

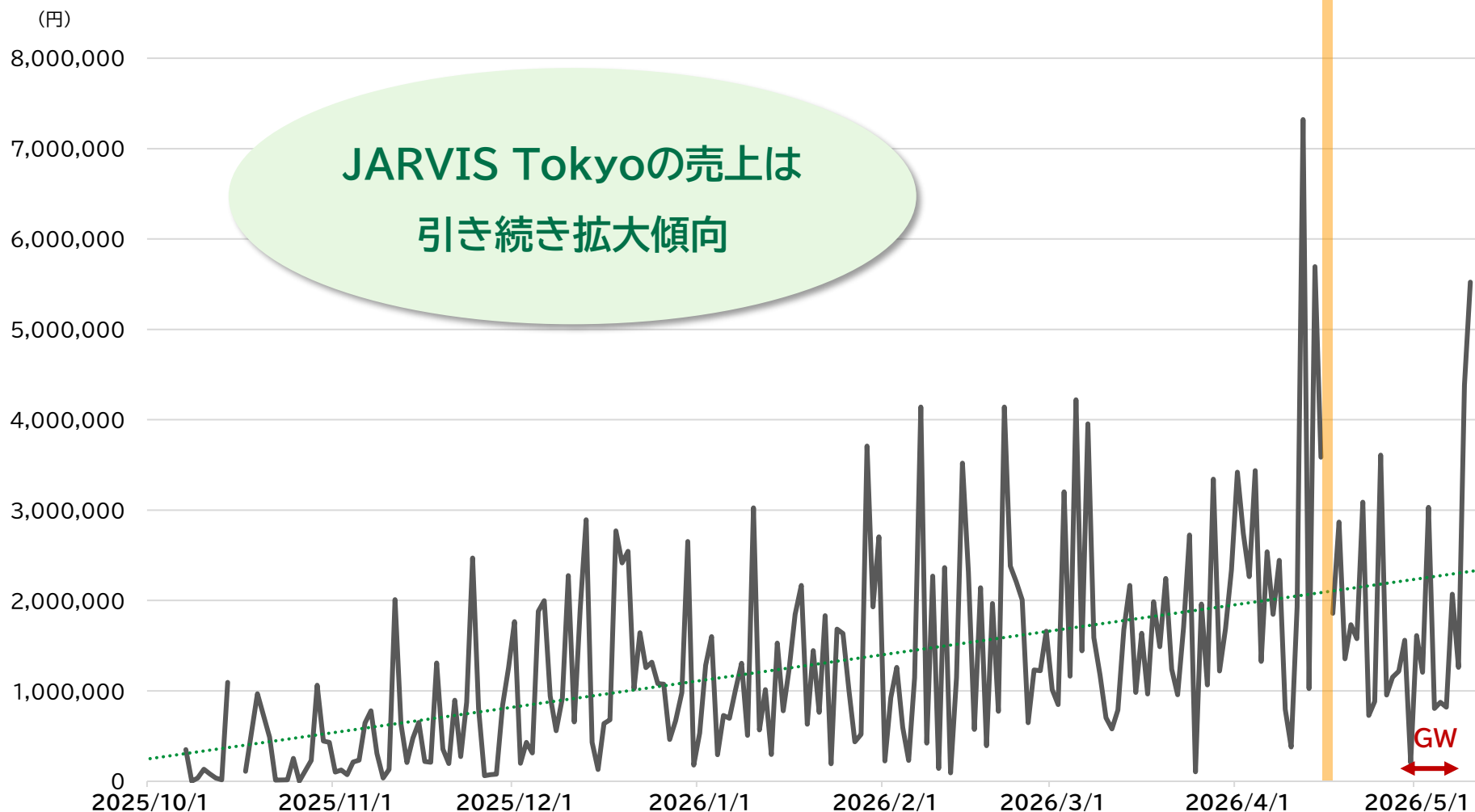
# 高度医療領域での具体的実装



※本章は、当社データ等に基づく分析・示唆を整理したものであり、医学的因果関係や効果を確定的に示すものではありません。

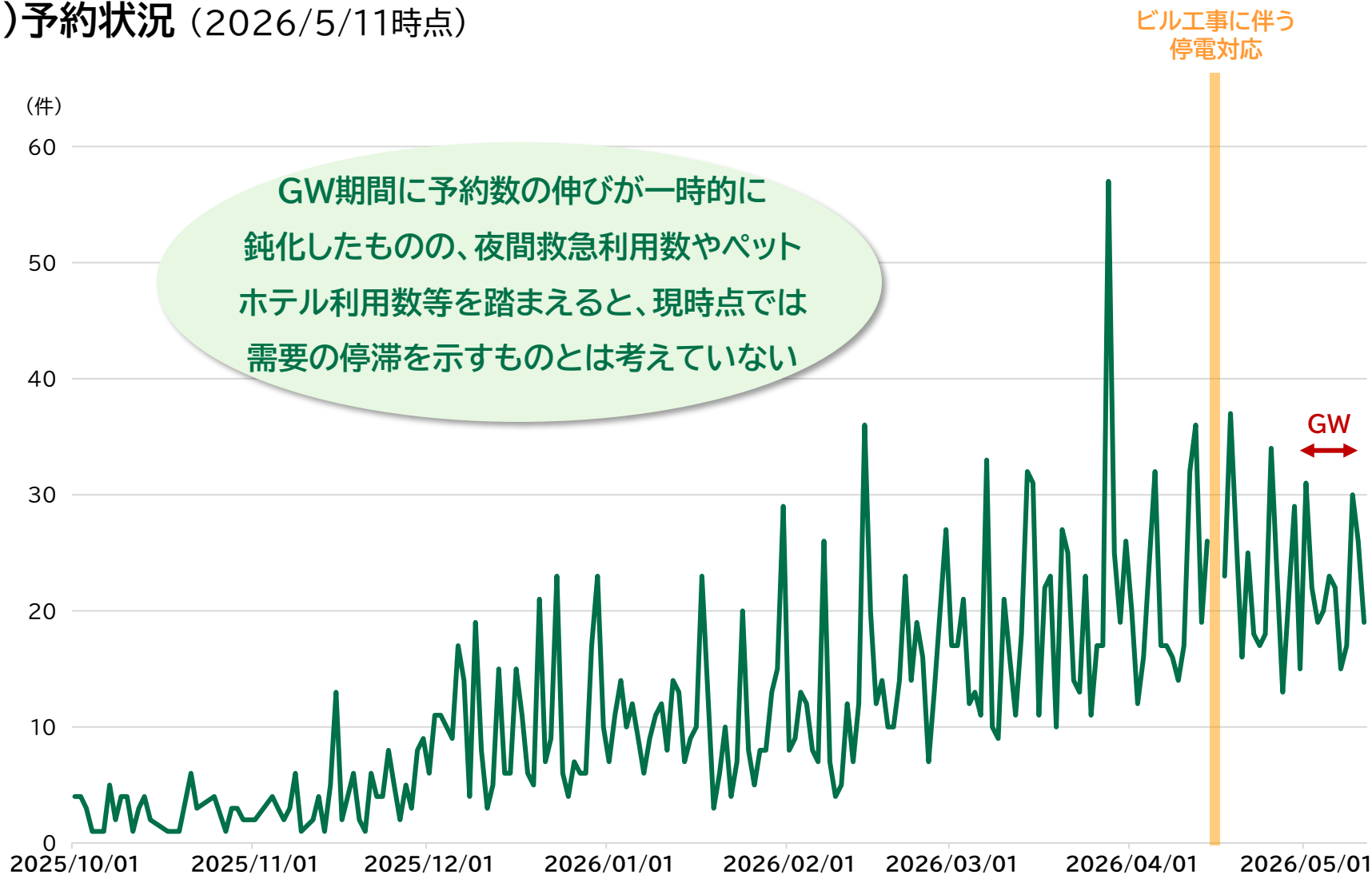
# 1. JARVIS どうぶつ医療センター Tokyo の状況

## (1) 日次売上 (2026/5/10時点)



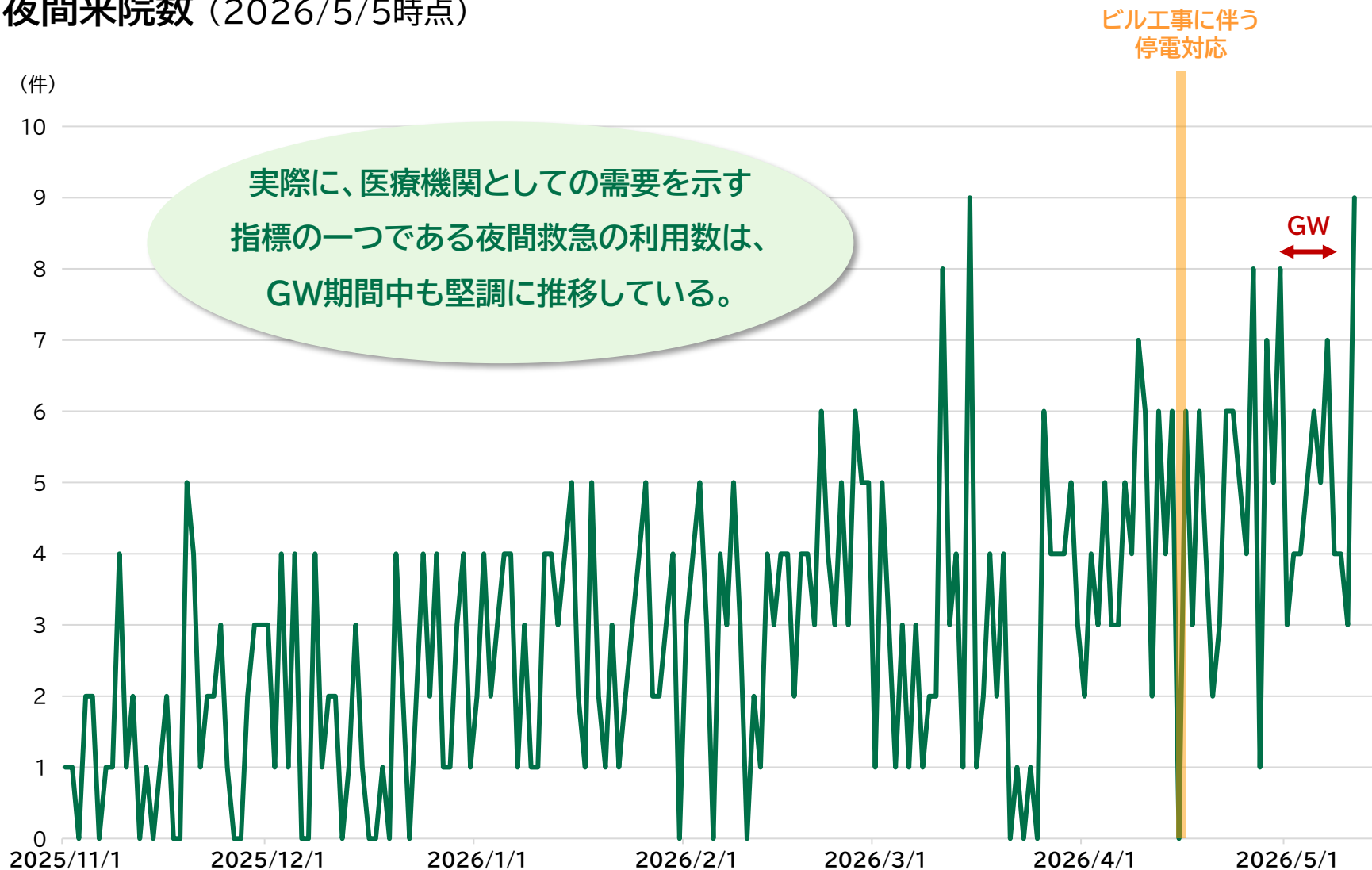
# 1. JARVIS どうぶつ医療センター Tokyo の状況

## (2) 予約状況 (2026/5/11時点)



# 1. JARVIS どうぶつ医療センター Tokyo の状況

## (3) 夜間来院数 (2026/5/5時点)

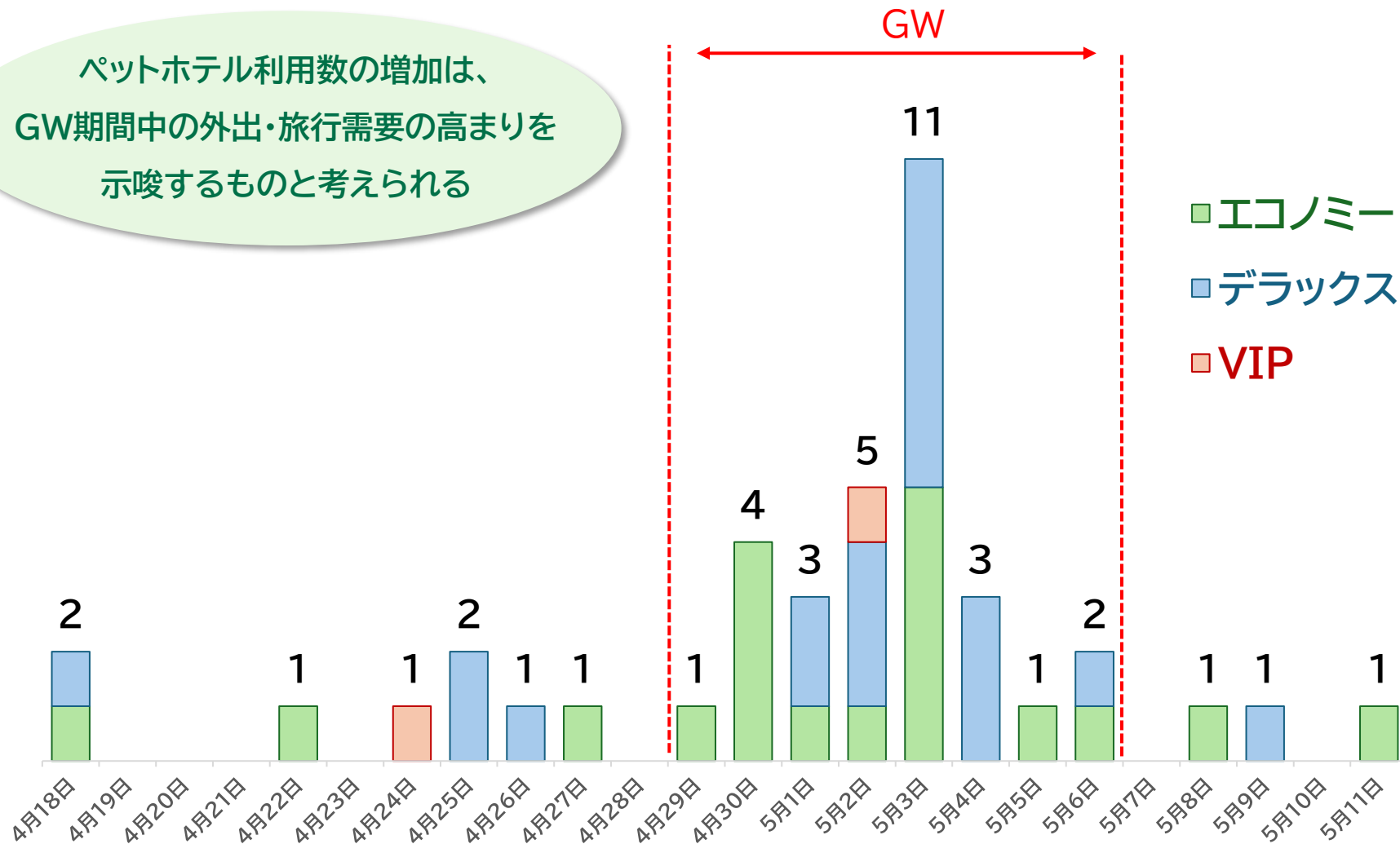


## 2. ペットホテル JARVIS Tokyo (同ビル6階) の状況

### ペットホテル利用数の日次推移

(2026/5/11 時点)

ペットホテル利用数の増加は、GW期間中の外出・旅行需要の高まりを示唆するものと考えられる



### 3. 高度動物医療における需要の状況

#### 高度動物医療事業の売上推移

他社の高度動物医療事業を見ると  
売上拡大を続けており、「需要」が  
あふれている状態と考え得る。



※国内の高度動物医療病院を運営する上場企業が公表しているIR資料を基に当社にて作成  
※市場動向を説明する目的で使用しています

# 4. 商圏の広がり



■……来院者分布

(2026/5/11 時点)

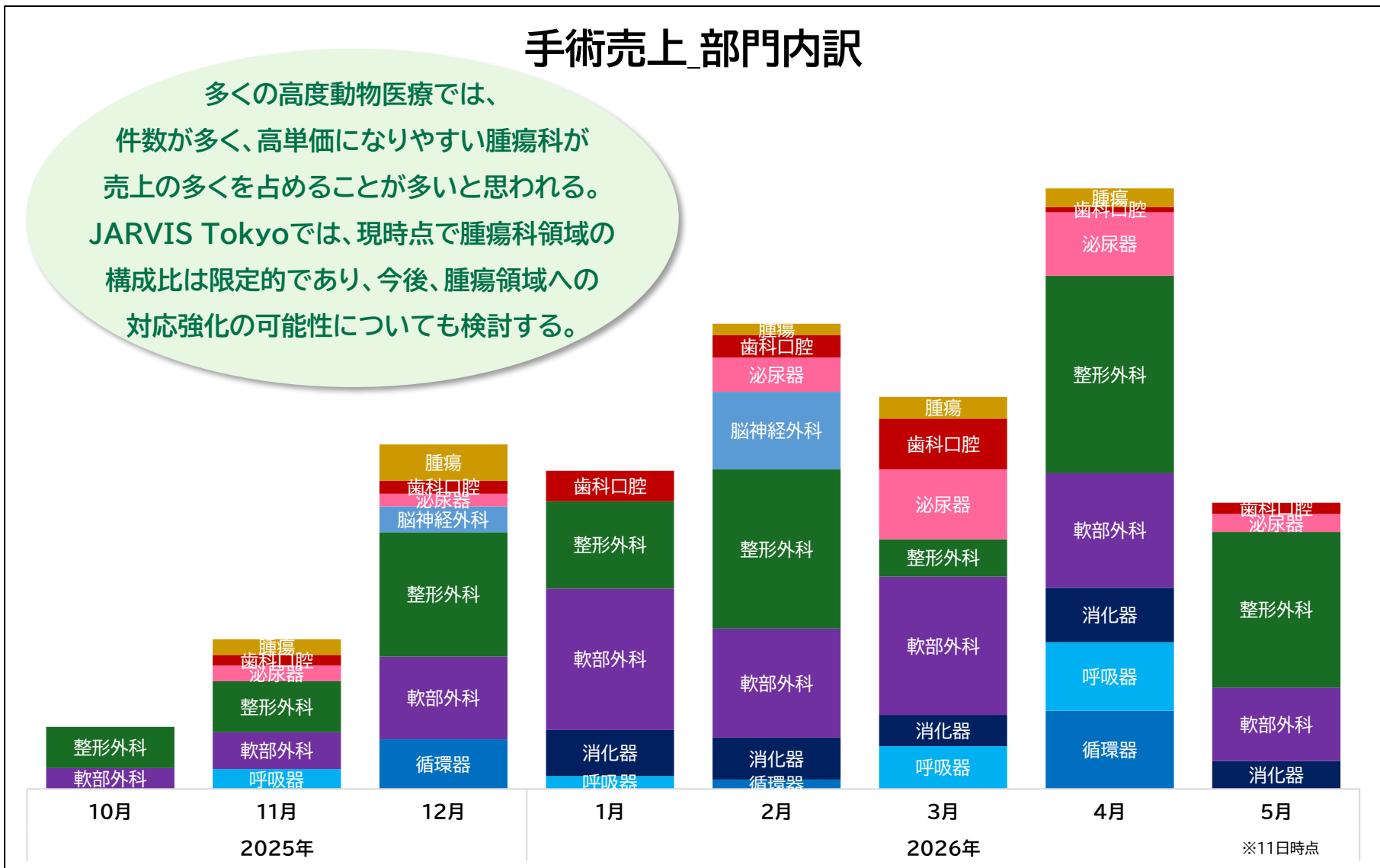
JARVIS Tokyoの来院者は  
10km圏内を中心であり、現時点では  
関東圏全体の需要を十分に取り切れて  
いない可能性がある。今後、供給体制の  
拡充可能性についても検討する。



# 5. 診療科の広がり

## 手術売上\_部門内訳

多くの高度動物医療では、件数が多く、高単価になりやすい腫瘍科が売上の多くを占めることが多いと思われる。JARVIS Tokyoでは、現時点で腫瘍科領域の構成比は限定的であり、今後、腫瘍領域への対応強化の可能性についても検討する。



# 6. まとめ



上述の状況を総合的に勘案すると、JARVIS Tokyo の実質的成長はGWに影響を受けず、  
続いている可能性が高いと判断し得る。

## 1 売上規模

4月月商は約7,000万円(税込)となり、単純年換算では年商8億円規模に相当。今後、年商10億円規模も視野に、さらなる成長を目指す。

## 2 市場需要

関東圏における十分な需要の存在は、  
同業種の業績が伸び続けていることから改めて確認できた。

## 3 ブランディング戦略

当社グループのブランド認知を活用したマーケティング戦略は、  
有効に機能しており、さらなるブランド認知向上に向けた取組みが、  
成長を牽引する可能性がある。

### 今後の重点課題

夜間における属人的な供給制約を解消し、常に実現可能な売上を**早期に回収**すること。  
加えて、日本における「ペット・保険」分野において、**高度動物医療事業の投資効率**を  
既存事業との比較を含め、**数字で示していく**こと。

